A History of Development of
“Tsubogami’s Social Work Relationship Theory”
—A Study of Hiroshi Tsubogami’s Social Work Methodology—

Yoshihiko HIZAWA
NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY
DEPARTMENT OF SOCIAL WELFARE AND PSYCHOLOGY

Abstract

The purpose of this paper is to take a historical overview of development of “Tsubogami’s social work relationship theory”, according to Tsubogami’s three periods, which is distinguished by his main life events. In the first period, he was social worker and a researcher in National Institute of Mental Health. It is followed by the second period, when he was a professor in Nihon Fukushi University, and the last period for a patient. A table, which presents his works and biography, is attached at the back of the paper.

It was found through this paper that he was going to overcome two subjects, split between practice and theory, and opposition study on social welfare policies and study on social work. To settle these problems, he has theorized about methodology through the observation in field practices for the first problem, and had introduced “historical viewpoint” into the methods of social work for the second problem.

Key Words

Tsubogami’s Social Work Relationship Theory, Historical Viewpoint, Spiral’s Social Work Relationship

要 旨

本報は、元日本福祉大学教授で社会福祉方法論研究者である坪上宏氏（以下、敬称略）が提唱したいわゆる「坪上援助関係論」構築の歩みを、国立精神衛生研究所において実践・研究活動を行っていた第1期、日本福祉大学教員時代の戦災被災者の年の16年間の第2期、戦災被災後現在までの第3期、という坪上自身による3期の区分にしたがって概観したものである。また参考資料として「坪上宏著目録及び略年譜」を作成した。

本研究から、坪上は自身の理論展開を通して、第1に実践と理論の乖離状況の克服、第2に社会福祉論のいわゆる政策論と技術論の拮抗状況の克服という2点の課題克服を目指していたことが分かった。坪上は第1の課題に対しては現場実践のなど自然な観察から共通要因を探り理論化していく姿勢を一貫して持つことになる。また第2の課題に対しては社会福祉方法論にいわゆる「歴史性」を導入させるという試みを行っている。

キーワード

坪上援助関係論、歴史性、循環的関係

新潟青陵大学紀要 第1号 2001年3月
1. はじめに

坪上宏氏（以下、人物敬称略）は、社会福祉方法論研究者として、国立精神衛生研究所（現在、国立精神保健研究所、以下同様と略す）社会精神衛生部技官、日本福祉大学社会福祉学部教授を歴任し、現在は精神障害者地域生活支援の研究グループ「やどかりの里」（谷中輝紀代表、大宮市）研究所長として研究活動を行っている。またそれに加えて、先述の「やどかりの里」の実践や、医療機関のソーシャルワーカーが中心となり活動を行っている「実践記録研究会」の活動に、1970年代前半から現在まで継続的にかかわりを持ってい

坪上は、社会福祉方法論の中心に援助関係を位置づけ、自身の援助関係論（以下、坪上援助関係論と略す）の中核概念として「循環的関係」概念を提示する。この「循環的関係」は、援助者が被援助者と援助関係を構築していく際に、援助者の「都合」だけで被援助者をとらえるのではなく、援助者の「都合」をいったん保留し、被援助者の言動の背景にある「都合」を通じて被援助者を理解し、さらに援助者自身の「都合」を見直していくという援助関係である。

筆者であり、ソーシャルワークの創始性とは何かという問題関心のもと、坪上援助関係論についてさまざまな角度から検討を行ってきた。いわゆる坪上援助関係論は、社会福祉実践者・研究者間で広く知られているものの、これまでその内容に具体的に言及した先行研究はほとんどなかった。しかし1998年に『援助関係論を目指して：坪上宏の世界』が出版されるなど、今後注目を集めることが予想される。

そこで本稿では、社会福祉方法論研究の一視点として、坪上援助関係論構築の歩みを、坪上による3期の区分にしたがって概観したい。また参考資料として「坪上宏著作目録及び略年譜」を作成し、同じく3期の区分に分けけて提示する。なお本稿中「現在まで」とした場合は、2000年12月末日までの動向としている。

2. 坪上援助関係論構築の歩み

先述のように坪上は自身の理論構築の歩みを、精研社会福祉学部技官として実践・研究活動を行っていた1962年（昭和37年）4月から1976年（昭和51年）8月までの14年4ヶ月の第1期、日本福祉大学教員として従事したうちの、はじめの16年間にあたる、1976年（昭和51年）9月から1992年（平成4年）9月までの第2期、1992年（平成4年）10月から現在までの第3期と、3期に分かれている。坪上は、1992年（平成4年）10月に重い肺炎を経験するが、これ以降、自身の立場が、研究者から患者へと変化したとするのである。

2-1. 第1期までの歩み（表1）

坪上は1924年（明治37年）に東京に生まれる。1945年（昭和20年）3月には学士院高等科を卒業しているが、同年4月から8月まで学徒兵として内陸出兵している。その後1946年（昭和21年）に東京大学法学部に入学する。坪上は大正生時代に、後に坪上援助関係論構築に大きな影響を与えることになる西洋経済史学者大塚久男の講義を受講している。坪上は、その後の大学教員時代に、「資本主義の発達過程に応じて社会福祉をとらえる」という歴史的観点を取り入れた社会福祉方法論講義の模索の時期に、大塚の「社会科学においての人間類型」の所論を援用するという試みを行っている。

東大に入学したものの、1948年（昭和23年）頃坪上は肺結核を患い、このときから3度の手術と5年間にわたる入院、約10年間でわたる療養生活を余儀なくされることになる。1951年（昭和26年）には結核療養のため、東大を中途退学している。この療養中坪上は友人紹介で、当時白十字病院医師であり、シュヴァイツァー研究の第一人者であった医師野村実に出会い、坪上はこの野村に「すっかり魅せられることになる。死と闘い合うものの闘病生活のなかでの野村との出会いは、坪上に援助関係の重要性を患者という立場で実験させ、その後の援助関係論構築に大きな影響を与えたと考えられる。

結核が徐々に回復に向かっていた頃、坪上
はある保健系雑誌に紹介されていた医療ソーシャルワーカーに関する記事を読み、ソーシャルワーカーを目指すことになる。そして1953年（昭28）日本社会事業学校研究科入学、翌年卒業し、また1955年（昭30）には東大経済学部に再入学し、翌年卒業する。その後東大教育学部心理学科専攻研究、自作字の字さつき、電報社労働組合ソーシャルワーカー等を経て、1962年（昭37）に精舎社会精神衛生部技官として就職し、実践・研究活動を始めるこことになる。

2-2. 第1期
国立精神衛生研究所時代（表2）

坪上は精舎時代、研究活動のみならず、精神医学ソーシャルワーカーとして相談業務も行っている。

第1期の主要論文としては、「医療社会事業の理念と展開」（昭67年）、「社会福祉の援助活動とは何か：ケースワーク論の再検討および試論」（昭70年）、「ケースワークの基本的枠組」（昭75年）等のものである。

坪上第1期の背景として、この時代の「学園紛争」に象徴される、科学や学問を享受していた者からの学問の世界全体に対する厳しい問い合わせ、すなわち実践を学問に従属させるといった考え方がこの時代にその根拠をもつという現象を挙げることができる。この時期に坪上は研究者としてこの問いかけを受け止めることになる。先述のように坪上は、ソーシャルワーカーの既成の知識や方法・技術の枠組みにとらわれることなく、一見「雑多」な様相を呈している現場実践から共通要因を探り、新たに方法・技術化する姿勢を一貫して持つが、このことは第1期の時代背景の影響が大きいと考えられる。坪上は、1971年（昭46年）から、東京の神経ソーシャルワーカーが中心となり結成した「実践・研究会」に、また1973年（昭48年）から、精神障害者地域生活支援のパイオニア的である「やどかりの里」の活動にかかわり始め、以後現在まで継続的に交流を持っているが、このことは坪上の一貫した姿勢を体現しているものといえよう。

2-3. 第2期 日本福祉大学時代（表3）

第2期は援助実践からは離れ、大学教員・研究者として活動を行った時期である。

第2期の主要論文としては、「社会福祉の方法・技術：援助活動における関係と人間像の問題を中心に」（昭79年）、「社会福祉実践における技術の意味」（昭81年）、「精神障害者とは：精神医学ソーシャルワーカーとは」（昭82年）、「援助関係論」（昭84年）等のものを挙げることができる。

第2期の特徴は、「現場実践」と「社会科学の認識」という「性格の異なる二者」と、「方法・技術論」との「切り結び」、発言するならば現場実践と理論の乖離、社会科学的視点と援助関係論的視点の拮抗、という2点の課題克服を目指したことに収斂することができる。

第1の課題である、現場実践と理论の乖離の課題克服については坪上は、社会福祉実践者や研究者の目による実践記録による「研究」の理解とそこからの理論構築、観察の概念構築、また精神保健福祉分野のソーシャルワーカー実践から共通要因を抽出し、そこから実践の志向と精神障害者をとらえる視点の提起等を行う。このような提起の背景には、坪上が常に持ちついている疑問、すなわち実践を社会科学的視点に従属させようとする傾向に対する疑問があった。

第2の課題である、社会科学的視点と援助関係論的視点の拮抗の課題克服については坪上は、「歴史性」の導入、すなわち資本主義の生成・発達段階とそこに見る人間像を反映させた援助関係論の展開を試みる。この難題に対し坪上は、先述の大塚久雄による「社会科学における人間像的问题」の所論を援用し、相手を「非人間化」する傾向の強い現代市民社会における市民の姿を歴史的観点から浮き彫りにする。その上に坪上は、相手を非人間的に手段化する要素を含んだ現代市民社会における対処として、相対的に分離独立している者が相対的に未分の状態にある相手との関に、循環的な性質をとおした関係を成立させることをとおして、一歩ずつお互いに分離独立した状態へと向かって努力を重ねる"ということ、
すなわち「循環的関係」を土台とした新たな市民社会の形成を提起するのである。

坪上はこの第2期において、「援助関係論」における最も重要な論文と位置づけられる「援助関係論」を発表している。この論文で坪上は、社会福祉援助活動を労働として捉えその労働の手段として援助関係を位置づける。そのうえで、「一方的関係」、「相互的関係」、「循環的関係」からなる援助関係の3性質を提起し、社会学者真木悠介（見田宗介）による「媒介」にかかわる「二重の媒介」論を援用する。そして「循環的関係」を、援助者を「媒介への媒介」に対する「気づき」へと導き、「変化」の契機となる関係として提示する。この「援助関係論」の論旨の詳細は別稿等に譲るが、被援助者のみならず援助者も「変化」する主体として位置づけた点は、坪上援助関係論の核となっている。

2-4. 第3期

－「患者」としての時代－（表4）

坪上は1992年（H.4）10月30日、突然の発作でおそわれる。その後の診断で、発作のその原因を肺炎の発症だったことが分かる。坪上はこの出来事を現在までを第3期と位置づけている。

また坪上は、これまで研究・教育に携わってきた日本福祉大学を1995年（H.7）3月に退官し、同年4月より、先述の「やどかりの里」研究所所長に就任し現在に至っている。研究所では、主に精神障害者の地域生活支援についての研究を行っている。

第3期は、患者という被援助者の立場から援助関係について論じている諸論文と、これまでの歩みを回想しながら今後の展望を述べている諸論文とに分けることができる。

患者という被援助者の立場から援助関係を展開している諸論文としては、「病の経験：低肺機能者の立場から」（1993）、「間接的処遇法再考：神田橋治氏の『抱える環境』」（1994）等を挙げることができる。また、これまでの歩みを回想している諸論文としては、先述した『援助関係論を目指して：坪上宏の世界』のほか、「日本福祉大学における社会福祉方法論教育：1担当者の私見として」（1993）、「援助関係論の歩み：33年」の足跡を振り返る」（1996）等を挙げることができる。

坪上は、肺炎罹患以降、「死を射程に入れる」怖さが自身に居著ることになったと述べている。このような心の坪上の支えになったものが、精神科病院神田橋治療による『抱える環境』の所論であった。

坪上は神田橋の所論を通じて、治療の核となるのは患者の「自然治癒力」、「自助の力」であり、それらは『抱える環境』を切り離して不行きうることを示す。この『抱える環境』の考え方から坪上は、「ワークナーにとって今まで難用と思われてきたことを」「利他の姿勢の観点」と「コトバの本質」とも言うべき観点に立ち返ると、それら全てが「『抱える環境』として、患者の増進に欠かせないものになりうる」ということが見てきたと述べている。かつてこのことは「間接的処遇法の再発見」につながったとするのである。

坪上は第3期において間接的処遇法の再検討という課題を提示して以降、論文等による理論展開は行っていない。しかし、「抱える環境」という様々な環境に支えられ、抱えられながら病と共存している坪上の現在の生活そのものが、新たな援助関係論の展開であるとも言える。このように考えると、坪上第3期は最も動的な援助関係論の展開が行われている時期といえよう。

3. 結 語

以上、本稿では坪上援助関係論構築の歩みを、坪上の略年譜及び著作目録を提示したうえで概観した。本稿から、坪上は自身の援助関係論の展開を通じて、特に坪上第2期の特徴に見るように、2点の課題克服を目指していたことが分かった。第1の課題は、科学や学問を享受していた者からの実践を学問的に従属させるといった風潮の強かった学問世界への厳しい問いかけ、すなわち実践と理論の乖離状況の克服である。第2の課題は、社会福祉のいわゆる政策論と技術論の拮抗、すなわち社会科学的視点にもとづく社会福祉論者への言語に「援助関係を『いわゆる人
間に関し一般に属するもの」として社会福祉のなかに外部の、現実的なのみ位置付けられないのかという、社会福祉方法論者としての疑問の克服である。坪上は第1の課題に対しては、実践現場を丹念に観察し、そこから共通要因を探り理論化していくという姿勢を一貫して持ちつづけることになる。また第2の課題に対しては、社会福祉方法論に「歴史性」を導入させるという試みを行う。坪上が行ったこの2点の課題克服の方法はそのまま坪土援助関係論の特徴といえる。

坪上は自身の援助関係論に、心理学、精神医学、社会科学等様々な領域における成果を自由に取り入れているが、その源流には、実存主義思想、現代学があると考えられる。筆者は今後、坪土援助関係論をさらに深めるために、この実存主義思想や現代学の坪土理論に対する影響についても検討を行う必要があると考えている。

なお本稿は、筆者の日本社会福祉学会中部会2000年春の例会自由研究発表の論旨の一部をもとにしている。

（注）
1) 笔者がこれまで、坪上援助関係論について検討・考察を行った論文・報告は次のとおり。

（論文）
1) 『坪上宏援助関係論の特徴』、日本福祉大学大学院社会福祉学研究科社会福祉学専攻博士前期課程修士学位請求論文、2000年
2) 『坪上宏援助関係論についての一考察：その変遷と特質の検討』、『日本福祉大学大学院社会福祉学研究科研究論集』13号、日本福祉大学大学院社会福祉学研究科研究論集編集委員会、2000年、23－32ページ

（報告）
1) 『坪上宏援助関係論の特徴についての一考察』、日本社会福祉学会第47回全国大会自由研究発表、1999年、川崎医療福祉大学
2) 『ソーシャルワークにおける『変わる』ということの意味：坪上宏『社会福祉の援助活動』の検討を通して』、日本社会福祉学会中部会2000年春の例会自由研究発表、2000年、中京大学
3) 『坪上宏援助関係論にみる変化』の意味：『循環的関係』の検討を通じて』、日本社会福祉学会2000年（第48回）全国大会自由研究発表（ポスター発表）、2000年、日本女子大学

2) 坪上援助関係論を主に取り上げている研究としては、住友雄資『『気づき』の援助関係論：坪上援助関係論によって』、川田賢一・大野勇丈・牧野忠信ほか編『社会福祉方法論の視点』、みらい、1996年、77－88ページがある。坪上の社会福祉方法論を「援助関係論」と呼んだのは、筆者の知る限り住友雄資論文が最初である。

3) 文献82、本書は「やどかりの里」創設者（現、理事長）谷中輝雄、日本精神医学ソーシャル・ワーク協会発元理事長（現、日本精神保健福祉士協会顧問）大野和男との親しい話を中心にまとめられており、坪上の主要論文5編（文献26、40、46、68、71）も収録されている。なお川田、久保による本書書評がある（川田賢一「書評：坪上宏の世界は周りの世界を映し出す」、『響き合う街』、通巻47号、やどかり出版、1999年、78－79ページ。久保賢三「書評：援助関係論を目指して：坪上宏の世界」、『ソーシャルワーク研究』、25巻、4号、相川書房、2000年、130－131ページ）。

新潟県立大学紀要 第1号 2001年3月
４）ある特定の人物の社会福祉理論の検討・考察を通じて独自の社会福祉理論を展開している研究は多数あるが、その中でも最近のものとしては、木原浩治による『J. アダムズの研究』（『J. アダムズの社会福祉実践思想の研究』、川島書店、1998年）、松本英男による「社会福祉理論のための考察」一の研究（『主体性の社会福祉論：明治前期社会福祉学入門』、法政出版、初版1993年、増補版1999年。「社会福祉理论研究のための考察」に寄稿）、『長崎女子大学文学部紀要』、30号、1995年、49—65ページ）等がある。


5）「坪上宏著作目録及び略年譜」は、著者、前掲書『坪上宏援助関係論の特質』において筆者が作成した「坪上宏年表」の一部を大幅に加筆・訂正したものである。

6）文部省77、10ページ。
7）文献82を参考にした。
8）文献69、5—6ページ。
9）文献82、26ページ。
10）文献19。
11）文献26。
12）文献28。
13）文献34。
14）文献40。
15）文献43。
16）文献46。
17）文献40、251—253ページ。
18）文献39。
19）文献48。
20）文献43。
A History of Development of "Tsubogami’s Social Work Relationship Theory"

（参考資料） 坪上宏著作目録及び略年譜　作成：植澤吉彦

（凡例）
1. 著作目録には、単行本所収論文、研究雑誌所収論文、翻訳書、書評、講演記録、座談会記録、及びその他著者が蓄積して発表されているものを含む。学会発表については精選在籍時の発表のみ。各種研究会の発表は論文を選んだものを含む。発表は原則として蓄者は現在までに蓄積したものを提示したが、収集できたかったものは確認できた範囲で提示した。
2. 著作には、1・2のように番号を付し、したがって本稿において坪上宏の著作を引用した際、脚注では引用文献の番号と引用書の内容を示す。
3. 略年譜は発表年代順に提示する。
4. 著作の表記はそれぞれ以下の通りとし、適宜変更した。また、著者論文・共同研究報告は坪上宏以外2名までを明記した。

①単行本所収論文
番号「論文名」単行本編著者名「書名」（発行所）ページ

②研究雑誌所収論文等
番号「論文名」雑誌編著者名「雑誌名」卷号（発行所）ページ

③著者紹介書（略年譜）
5. 略年譜には2000年12月末日までの国内の主な動向及び社会福祉・精神保健福祉の主要動向のみ併記した。略年譜表の中の項別の年月日は、大正は丁、昭和は辛、平成はHとした。
6. 作成にあたっては以下の文献を参考にした。

（著作目録及び略年譜）
(1) "所収研究業績", "精神衛生研究", 1901—22, 24号, 国立精神衛生研究所, 1962年～1977年
(2) "坪上宏の年表", 坪上宏, 谷中輝彦, 大野和雄編 "援助関係論を目指して: 坪上宏の世界", やすか出版, 1998年, 338—341ページ
(3) "社会福祉・精神保健福祉の主要動向", 福井隆次編 "精神保健福祉年表", 家政教育社, 1979年
(4) 吉田幸尾 "日本における社会福祉の展開", 一番ヶ浦康子, 高島進編 "社会福祉の歴史: 講座社会福祉第2巻", 学歴出版, 1981年, 80—134ページ
(5) "社会福祉年表", 辞典刊行委員会編 "社会保障・社会福祉辞典", 労働局, 1989年, 789—834ページ
(6) 大矢元彦 "20世紀福祉ビジョン策定から介護保険制度までの動向と主要論文", 日本福祉大学社会福祉学会編 "介護保険法の実施と介護保険法の将来", あけぼの書房, 1998年, 288—303ページ
(7) "高橋一夫" 教育における精神保健福祉の歴史", 日本精神医学ソーシャル・ーウーカー協会編 "改訂これらの精神保健福祉: 精神保健福祉士ガイドブック", へろす出版, 1998年, 19—33ページ

（表1）

坪上第1期までの歩み

<table>
<thead>
<tr>
<th>西暦</th>
<th>年齢</th>
<th>坪上宏著作目録及び略年譜</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1924</td>
<td>13</td>
<td>東京都に生まれる。</td>
</tr>
<tr>
<td>1925</td>
<td>14</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1926</td>
<td>15</td>
<td>12月大正元年、昭和に改元</td>
</tr>
<tr>
<td>1927</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>1928</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>1929</td>
<td>4</td>
<td>5 (4月「教育法」交付 (1932年1月施行))</td>
</tr>
<tr>
<td>1930</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
</tr>
<tr>
<td>1931</td>
<td>6</td>
<td>7 (9月満州事変)</td>
</tr>
<tr>
<td>1932</td>
<td>7</td>
<td>8 (大関道兵を殺す (8月15事件))</td>
</tr>
<tr>
<td>1933</td>
<td>8</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>1934</td>
<td>9</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>1935</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>1936</td>
<td>11</td>
<td>12 (7月陸軍将校によるクーデター事件 (2月16事件))</td>
</tr>
<tr>
<td>1937</td>
<td>12</td>
<td>13 東京府立第一中学校入学 (7月14日)</td>
</tr>
<tr>
<td>1938</td>
<td>13</td>
<td>14 (3月「社会事業法」交付 (S.26 &quot;社会福祉事業法&quot;)</td>
</tr>
<tr>
<td>1939</td>
<td>14</td>
<td>15</td>
</tr>
<tr>
<td>1940</td>
<td>15</td>
<td>16</td>
</tr>
<tr>
<td>1941</td>
<td>16</td>
<td>17 (12月日本軍米ハワイ突貫隊攻撃、米兵に対し宣戦布告、太平洋戦争勃発)</td>
</tr>
<tr>
<td>1942</td>
<td>17</td>
<td>18 東京府立第一中学校卒業</td>
</tr>
<tr>
<td>1943</td>
<td>18</td>
<td>19 (6月学徒夏期活動体制確立)</td>
</tr>
<tr>
<td>1944</td>
<td>19</td>
<td>20</td>
</tr>
<tr>
<td>1945</td>
<td>20</td>
<td>21 東京府立第一中学校卒業</td>
</tr>
<tr>
<td>1946</td>
<td>21</td>
<td>22 4月東京大学経済学部入学 (9月 &quot;生活保護法 (旧) &quot;公布 (S.25新法))</td>
</tr>
<tr>
<td>1947</td>
<td>22</td>
<td>23 12月 &quot;児童福祉法 &quot;公布</td>
</tr>
</tbody>
</table>

新潟県立大学紀要 第1号 2001年3月
<table>
<thead>
<tr>
<th>年代</th>
<th>頃歴</th>
<th>年齢</th>
<th>坪上安著作目録及び略年譜</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1948</td>
<td>S. 23</td>
<td>24</td>
<td>3月国立大久保病院にて左脳骨4本形成手術を受ける。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>4月肺結核のため東大休学。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>9月国立大久保病院再入院。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>（国立国府台病院にて肺結核のため大休学。）</td>
</tr>
<tr>
<td>1949</td>
<td>S. 24</td>
<td>25</td>
<td>右肺結核再発、医師会病院再入院し、2度目の手術を受ける。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>（12月「肺受傷者療養法」公布）</td>
</tr>
<tr>
<td>1950</td>
<td>S. 25</td>
<td>26</td>
<td>右肺結核再発、白十字病院に入院し、3度目の手術を受ける。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>5月「生活保護法（新）」公布</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>（制定）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>5月「精神衛生法」公布、🔴精神病者監護法」（M. 33）、「精神病院法」（T. 8）廃止</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>（10月社会保障制度審議会第一号報告）</td>
</tr>
<tr>
<td>1951</td>
<td>S. 26</td>
<td>27</td>
<td>3月肺結核のため東大退学。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>6月「社会福祉事業法」公布</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>（9月对日和解条約・日米安保条約調印）</td>
</tr>
<tr>
<td>1952</td>
<td>S. 27</td>
<td>28</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1953</td>
<td>S. 28</td>
<td>29</td>
<td>4月日本社会事業学校研究科1年コース入学。</td>
</tr>
<tr>
<td>1954</td>
<td>S. 29</td>
<td>30</td>
<td>4月から1年間関東大学病院神経科実習。</td>
</tr>
<tr>
<td>1955</td>
<td>S. 30</td>
<td>31</td>
<td>4月東京経済大学に入学（1年間で卒業）。</td>
</tr>
<tr>
<td>1956</td>
<td>S. 31</td>
<td>32</td>
<td>4月東京教育大学理学教室神経科実習（1年間）、東大分院にて神経科実習。</td>
</tr>
<tr>
<td>1957</td>
<td>S. 32</td>
<td>33</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1958</td>
<td>S. 33</td>
<td>34</td>
<td>4月白十字サルトリウムM S W（非常勤）、</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>電気工事に従事。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>（12月「国民健康保険法」改正公布）</td>
</tr>
<tr>
<td>1959</td>
<td>S. 34</td>
<td>35</td>
<td>4月「国民健康保険法」公布</td>
</tr>
<tr>
<td>1960</td>
<td>S. 35</td>
<td>36</td>
<td>1月新生精神感動・協同協定調印</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>6月「精神弱者福祉法」公布</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>（7月「身体障害者雇用促進法」公布）</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(表2) 坪上安第1期（1962年（S. 37）4月～1976年（S. 51）8月）

<table>
<thead>
<tr>
<th>年代</th>
<th>頃歴</th>
<th>年齢</th>
<th>坪上安著作目録及び略年譜</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1962</td>
<td>S. 37</td>
<td>38</td>
<td>4月国立精神衛生研究所社会精神衛生部技官。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>7月から休職し、自宅療養。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>（論文）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>1. ケースワーカーの性格特性について：結核療養所に療養ケースワーカーの実態調査の結果より 2. 「ケースワーカーとカウンセリング」：医療機関における相談活動について：日本産業カウンセリング協会編「職務と人間関係」3号（帯付）62～68ページ</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>3. 病院内精神健康管理：新しい方法と対策」 4. マネジメント」21卷9号（日本能率協会）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>68～72ページ</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>（学会発表）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>「内市病院に住民の態度形成の背景」（田村隆二共同）35回日本社会学会大会</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>「PSKの実態について」（柏木昭・鈴木浩二共同）10回日本社会福祉学会</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>「NMP自発的なもの的基本」（鈴木浩二）（肥田野直・平田久雄他共同）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>第36回日本心理学会</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>「患者連帯のダイナミックス構造」（柏木昭・鈴木浩二共同）日本社会学会</td>
</tr>
<tr>
<td>1963</td>
<td>S. 38</td>
<td>39</td>
<td>7月白十字病院に入院。入院中にアブテーカー著「ケースワーカーとカウンセリング」の翻訳を行う。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>（7月「老人福祉法」公布）</td>
</tr>
<tr>
<td>1964</td>
<td>S. 39</td>
<td>40</td>
<td>6月精神復職。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>11月に発足した日本精神医学ソーシャル・ワーク協会（現・日本精神保健福祉士協会、P S W協会と略す）初代事務局長に。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>（翻訳）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>アブテーカ『ケースワーカーとカウンセリング』（誠実書房、原著は1955年）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>（論文）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>5. 「診断方法と機能要素」（柏木昭・鈴木浩二共同）医療ソーシャル・ワーク5号（東京都医療社会事業協会）19～21ページ</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>6. 「精神医学の精神医学構造に関する研究」（横山健三・田村健二共同）精神衛生研究11号（国立精神衛生研究所）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>7. 「精神医学ソーシャル・ワークに関する実態調査」第1報（柏木昭・鈴木浩二共同）精神衛生研究12号（国立精神衛生研究所、ページ不明）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>8. 「精神医学ソーシャル・ワークの実態について」（鈴木浩二・柏木昭他共同）日本精神医学</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>（第6号（ページ不明））</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>（学会発表）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>「東大院総合性格検査（TP）の作成」の1～5号（肥田野直・平田久雄他共同）第28回日本心理学会</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>3月ライシャワ米大使刺殺事件起こる。5月厚生大臣「精神衛生法」改正案</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>（7月「母子福祉法」公布、福祉六法体制へ）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>（11月「日本精神医学ソーシャル・ワーク協会」発足）</td>
</tr>
</tbody>
</table>

新潟青陵大学紀要 第1号 2001年3月
<table>
<thead>
<tr>
<th>年代</th>
<th>所属</th>
<th>年齢</th>
<th>坪山宏造年譜及び著作目録</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1965</td>
<td>S.40</td>
<td>41</td>
<td>4月 P.S.W.協会常任理事となる（1974年3月まで）。&lt;br&gt;（論文）&lt;br&gt;9「わが国におけるソーシャル・ワークの諸問題」（準生）444号（ページ不明）&lt;br&gt;10「医療におけるソーシャル・ワーク」（論文）10巻12号（川岛書店7-11ページ）（川上 武「医療機関とケース・ワーカー：ケース&lt;br&gt;ワーカーは若手であるべきか」前掲「医療と福祉」2巻9号2-7ページと、岡田晴雄「精神医学&lt;br&gt;におけるソーシャル・ワーク：精神医学ソーシャル・ワーカーが必要か」同上巻10号8-12&lt;br&gt;ページに対する反論）&lt;br&gt;（学会発表）&lt;br&gt;・「EPICコードの研究」（藤田野直己共著）第7回日本教育心理学会&lt;br&gt;・「精神分裂症患者の社会適応」（柏木昭・齋藤和子他共著）第13回日本社会福祉学会&lt;br&gt;（6月「精神障害法」改正）</td>
</tr>
<tr>
<td>1966</td>
<td>S.41</td>
<td>42</td>
<td>坪上栄子と結婚。&lt;br&gt;（編著）&lt;br&gt;11「出弘之共編『精神衛生』（川島書店）&lt;br&gt;（論文）&lt;br&gt;12「日本精神衛生をささえるものに社会学的な基礎」前掲『精神衛生』54-66ページ&lt;br&gt;13「日本現代社会と精神衛生」日本社会学会開催「後戦日本の社会学会」19-37ページ&lt;br&gt;14「ソーシャル・ワーク活動の手段：カウンセリングとケース・ワーカー」同上191-202ページ&lt;br&gt;15「遺族の心理」前掲同11号16-17ページ&lt;br&gt;16「家族の悲劇（その1）：保健活動に関連して」前掲同18巻10-16ページ&lt;br&gt;17「家族の悲劇（その2）：保健活動に関連して」前掲同19巻9-33ページ&lt;br&gt;（7月「特別児童扶養手当法」公布）</td>
</tr>
</tbody>
</table>
| 1967 | S.42 | 43   | 第3回P.S.W.協会全国大会で「やどかりの里」創設者谷中輝雄（当時明治学院大学大学院生）<br>と出会う。10月東京大学保健学科非常勤講師（1985年3月まで）。日本社会事業大学非常勤講師。<br>（論文）<br>18「精神衛生センター運営に関する試案」（加藤正明・高村武史・玉井康介・柏木 昭・山本和長著）『精神衛生研究』16号（国立精神衛生研究所）95-124ページ<br>19「医療社会事業の理念と展開」日本社会事業大学「後戦日本の社会事業」（戦前防疫）<br>335-354ページ<br>20「勤労青少年の心理」労働省婦人部編「カウンセリングを職場に生かそう！産業ソーシャル<br>カウンセリングの手引き：年少労働者一般資料第25集」（労働省婦人部）89-137ページ<br>21「精神障害者の自己決定について」『精神医学ソーシャル・ワーク』1巻2号（日本精神医<br>学ソーシャル・ワーカー協会）67-68ページ<br>（学会発表）<br>・「地域指導者の精神衛生についての意識」（柏木昭・今田孝枝他共著）第3回精神医学ソシ<br>ャル・ワーカー協会全国大会<br>（論文）<br>22「T.M.ビッグ「職場の精神衛生と人間関係」（国立研究審査（当時）笠松政男・新製品共編、原書は1954年）<br>23「地域指導者の精神衛生についての意識：第2編」（柏木昭・佐藤竹人他伴著）『精神医学<br>ソーシャル・ワーク』3巻1号（日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会、ページ不明）<br>（学会発表）<br>・「地域指導者の精神衛生についての意識：第2編」（柏木昭・佐藤竹人他伴著）『精神医学<br>ソーシャル・ワーク』3巻1号（日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会、ページ不明）<br>（学会発表）<br>・「社会福祉の援助におけるわゆる技術論の立場の再検討」第17回日本社会福祉学会<br>（論文）<br>26「社会福祉の援助活動とは何か：ケース・ワーカー論の再検討より試論へ」『精神医学ソシ<br>ャル・ワーク』2巻1号（日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会）2-12ページ<br>（P.S.W.協会全国大会シンポジウム講座）<br>27「パネルディスカッション要旨」『精神医学ソーシャル・ワーク』3巻2号（日本精神医学<br>ソーシャル・ワーカー協会）2ページ<br>（学会発表）<br>・「社会福祉の援助活動とは何か：ケース・ワーカー論の再検討より試論へ」『精神医学ソシ<br>ャル・ワーク』2巻1号（日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会）2-12ページ<br>（P.S.W.協会全国大会シンポジウム講座）<br>27「パネルディスカッション要旨」『精神医学ソーシャル・ワーク』3巻2号（日本精神医学<br>ソーシャル・ワーカー協会）2ページ<br>（学会発表）<br>・「社会福祉の援助活動とは何か：ケース・ワーカー論の再検討より試論へ」『精神医学ソシ<br>ャル・ワーク』2巻1号（日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会）2-12ページ<br>（P.S.W.協会全国大会シンポジウム講座）<br>27「パネルディスカッション要旨」『精神医学ソーシャル・ワーク』3巻2号（日本精神医学<br>ソーシャル・ワーカー協会）2ページ<br>（学会発表）<br>・「社会福祉の援助活動とは何か：ケース・ワーカー論の再検討より試論へ」『精神医学ソシ<br>ャル・ワーク』2巻1号（日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会）2-12ページ<br>（P.S.W.協会全国大会シンポジウム講座）<br>27「パネルディスカッション要旨」『精神医学ソーシャル・ワーク』3巻2号（日本精神医学<br>ソーシャル・ワーカー協会）2ページ<br>（学会発表）<br>・「社会福祉の援助活動とは何か：ケース・ワーカー論の再検討より試論へ」『精神医学ソシ<br>ャル・ワーク』2巻1号（日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会）2-12ページ<br>（P.S.W.協会全国大会シンポジウム講座）<br>27「パネルディスカッション要旨」『精神医学ソーシャル・ワーク』3巻2号（日本精神医学<br>ソーシャル・ワーカー協会）2ページ<br>（学会発表）<br>・「社会福祉の援助活動とは何か：ケース・ワーカー論の再検討より試論へ」『精神医学ソシ<br>ャル・ワーク』2巻1号（日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会）2-12ページ<br>（P.S.W.協会全国大会シンポジウム講座）<br>27「パネルディスカッション要旨」『精神医学ソーシャル・ワーク』3巻2号（日本精神医学<br>ソーシャル・ワーカー協会）2ページ<br>（学会発表）<br>・「社会福祉の援助活動とは何か：ケース・ワーカー論の再検討より試論へ」『精神医学ソシ<br>ャル・ワーク』2巻1号（日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会）2-12ページ<br>（P.S.W.協会全国大会シンポジウム講座）<br>27「パネルディスカッション要旨」『精神医学ソーシャル・ワーク』3巻2号（日本精神医学<br>ソーシャル・ワーカー協会）2ページ<br>（学会発表）<br>・「社会福祉の援助活動とは何か：ケース・ワーカー論の再検討より試論へ」『精神医学ソシ<br>ャル・ワーク』2巻1号（日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会）2-12ページ<br>（P.S.W.協会全国大会シンポジウム講座）<br>27「パネルディスカッション要旨」『精神医学ソーシャル・ワーク』3巻2号（日本精神医学<br>ソーシャル・ワーカー協会）2ページ<br>（学会発表）<br>・「社会福祉の援助活動とは何か：ケース・ワーカー論の再検討より試論へ」『精神医学ソシ<br>ャル・ワーク』2巻1号（日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会）2-12ページ<br>（P.S.W.協会全国大会シンポジウム講座）<br>27「パネルディスカッション要旨」『精神医学ソーシャル・ワーク』3巻2号（日本精神医学<br>ソーシャル・ワーカー協会）2ページ<br>（学会発表）<br>・「社会福祉の援助活動とは何か：ケース・ワーカー論の再検討より試論へ」『精神医学ソシ<br>ャル・ワーク』2巻1号（日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会）2-12ページ<br>（P.S.W.協会全国大会シンポジウム講座）<br>27「パネルディスカッション要旨」『精神医学ソーシャル・ワーク』3巻2号（日本精神医学<br>ソーシャル・ワーカー協会）2ページ<br>（学会発表）<br>・「社会福祉の援助活動とは何か：ケース・ワーカー論の再検討より試論へ」『精神医学ソシ<br>ャル・ワーク』2巻1号（日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会）2-12ページ<br>（P.S.W.協会全国大会シンポジウム講座）<br>27「パネルディスカッション要旨」『精神医学ソーシャル・ワーク』3巻2号（日本精神医学<br>ソーシャル・ワーカー協会）2ページ

新潟県立大学紀要 第1号 2001年3月
<table>
<thead>
<tr>
<th>年代</th>
<th>邦歴</th>
<th>年齢</th>
<th>坪上実務年数及び著作目録</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1973</td>
<td>S.48</td>
<td>49</td>
<td>「やどかりの里」をはじめて訪れる。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>精研室長となる。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>(1月70歳以上の老人医療費無料化制度発足)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>(2月「健康保養法」改正。家族給付率7割。家族高齢者対象新設)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>(10月65歳以上の戦後老人に対する老人医療費無料制度を施行)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>(2月。第9回日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会全国大会の場で不当入院を告発)</td>
</tr>
<tr>
<td>1974</td>
<td>S.49</td>
<td>50</td>
<td>早川進（故人、元高知女子大学保健学科大学院教授）と現象学研究会を自宅にて開催する。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>谷中を早川に紹介する。</td>
</tr>
<tr>
<td>1975</td>
<td>S.50</td>
<td>51</td>
<td>(論文)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>28「ケースワークの基本的枠組」松原昭編「ケースワーク論」(有斐閣)39—51ベージ</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>29「ソーシャル・ワークの意義を問い直す」（実践記録：医療相談室からのレポート）5巻（実践記録研究会、以下3巻）72—77ページ</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>(12月国連総会、「障害者の権利宣言」を採択)</td>
</tr>
<tr>
<td>1976</td>
<td>S.51</td>
<td>52</td>
<td>9月精研を退職。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>10月日本福祉大学社会福祉学部教授就任。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>(論文)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>20「実践記録からひき出した課題」『実践記録：実践記録の諸課題』(2巻)6—13ページ</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（表3）

<table>
<thead>
<tr>
<th>年代</th>
<th>邦歴</th>
<th>年齢</th>
<th>坪上実務年数及び著作目録</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1977</td>
<td>S.62</td>
<td>53</td>
<td>（論文）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>31「実践の問題：援助活動における価値の問題として」『実践記録：現場からの報告と課題』1巻51—67ページ</td>
</tr>
<tr>
<td>1978</td>
<td>S.53</td>
<td>54</td>
<td>（論文）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>32「精神障害者の福祉と保健」宮崎誠夫編『講座現代と保健別冊3：福祉と保健』(大修館書店) 202—233ページ</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>33「社会資源：その活用を中心として」『実践記録：社会資源に関わる考察』8巻63—74ページ</td>
</tr>
<tr>
<td>1979</td>
<td>S.54</td>
<td>55</td>
<td>実践記録研究会の事務局を日本福祉大学坪上研究室に置く。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>(論文)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>34「社会福祉の方法・技術；援助活動における関係と人間像の問題を中心に」日本福祉大学社会科学研究所編『社会福祉の明日を』(ミネルヴァ书房) 79—99ページ</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>35「社会福祉の方法・技術；援助活動における関係と人間像の問題を中心に」日本福祉大学社会科学研究所編『社会福祉の明日を』(ミネルヴァ书房) 79—99ページ</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>35「社会福祉の方法・技術；援助活動における関係と人間像の問題を中心に」日本福祉大学社会科学研究所編『社会福祉の明日を』(ミネルヴァ书房) 79—99ページ</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>36「実践記録：実践記録と現時点での課題」(昭和47年)74—89ページ</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>(5月第5回「国際障害者年当り、障害者への補助金の給付と同等の実現を図る決議」を可)</td>
</tr>
<tr>
<td>1980</td>
<td>S.55</td>
<td>56</td>
<td>39「実践と理論の関係：その解明を求める」『実践記録：実践と実践理論』10巻95—106ページ</td>
</tr>
<tr>
<td>1981</td>
<td>S.56</td>
<td>57</td>
<td>（論文）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>40「社会福祉実践における『技術』の意味」（論文）村松一・監修、野村、秋山佳久編『社会福祉方法論講座1：基本の枠組』(誠文堂新光社) 251—273ページ</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>41「社会福祉実践における実践記録と現時点での課題」(昭和47年)74—89ページ</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>(5月第5回「国際障害者年当り、障害者への補助金の給付と同等の実現を図る決議」を可)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>3月臨時行政調査会、第1、第2特別部会報告を承、老人医療無料制の撤廃、年金給付の国庫負担の削減など)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>(6月臨時行政調査会第1次答申「児童手当制度の抜本的見直しなど」)</td>
</tr>
<tr>
<td>1982</td>
<td>S.57</td>
<td>58</td>
<td>（編著）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>42片村健二・浜田隆・関上和雄共編『精神障害者福祉』(相川書房)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>(論文)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>43「精神障害者とは：精神医学ソーシャルワーカーとは」前掲『精神障害者福祉』94—115ページ</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>44「学習記録とその後に考えたこと：自己覚知・異和感・記録の条件」『実践記録：その条件に関連して』12巻93—107ページ</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>(3月国際障害者年当り、今後10年の「障害者政策計画」を決定)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>(7月「老人保健法」公布)</td>
</tr>
<tr>
<td>1983</td>
<td>S.58</td>
<td>59</td>
<td>（論文）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>45「時代状況と自己覚知：転向の観点から」『実践記録：条件設定の諸相』13巻78—88ページ</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（3月臨時行政調査会最終答申）
| 年代 | 邦語 | 年齢 | | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 1984 | S. 59 | 60 | 46「援助関係論」伸村修一、小松原弘編『社会福祉実践の方法と技術：講座社会福祉第5巻』(有斐閣) 80—117ページ
47「異質の人への捉え方：人間理解の都市解析論法設定の試み」『実践記録：その条件：適心と求心』14巻編61—127ページ
(宇都宮病院事件、マスコミで報道される。6月厚生省、精神療病院に対する指導監督等の強化徹底についての通知)
(8月「身体障害者福祉法」改正（身体障害の範囲拡大）)
(8月「健康保険法」改正（被用者本人に定率1割負担を導入）) |
| 1985 | S. 60 | 61 | 48「8条件のさしかかった道：貝塚厚の疑問に関連して」『実践記録：条件の意義を問い直す』15巻66—100ページ
49「実践記録：その方法についての一考察」『ソーシャルワーク研究』1巻2号(相川書房) 36—41ページ
50「精神障害者福祉：その接近法についての一考察」『日本福祉大学社会科学研究所報』35号(日本福祉大学社会科学研究)1—24ページ
(3月宇都宮地裁、宇都宮病院事件で前院長に実刑判決)
(5月「国民年金法」改正（基礎年金の導入等）)
(7月老人福祉審議会、老人保健制度の見直しに関する中間意見提出（中間施設の必要性等）)
(10月厚生省、精神療病院入院者の通信・面会に関するガイドラインについて通知) |
| 1986 | S. 61 | 62 | 51「治療の要件と8条件：要件の診断的色合いについて」『実践記録：時代状況と実践記録』16巻132—143ページ
52「人間のとりまき方：精神障害者福祉に関連して」『日本福祉大学社会科学研究研究所報』(日本福祉大学社会科学研究)84—109ページ
(33巻編3号)『実践記録：条件の意義を問い直す』15巻66—100ページ
(10月厚生省、精神障害者福祉の実践者との会面に関するガイドラインについて通知) |
| 1987 | S. 62 | 63 | 55「「あたりまえの生活」をめぐって：１つの結び」日本精神医学ソーシャル・ワーク協会編『精神障害者の「あたりまえの生活」の実現をめざして：医療と福祉の連携をすすめるPSWの課題』(日本精神医学ソーシャル・ワーク協会)161—169ページ
56「意外だったこと」『実践記録：記録者の省察と実践』17巻92—98ページ
(3月「老人保健法」改正（一部負担金の引上げ等）) |
| 1988 | S. 63 | 64 | 58「2つの診断：神田橋団治氏の「精神科診断面接のコツ」に接して」『実践記録：経験の省察と記録』18巻111—119ページ
(編著)
59「私の推薦図書」中井久夫著『精神科診断の教書』日本評論社、1982年』『精神医学ソーシャル・ワーク』18巻4号(日本精神医学ソーシャル・ワーク協会)72—73ページ |
| 1989 | S. 64 | 65 | 60「偏見・差別について」柏尾毅監修『くらしの知恵：精神障害者地域ハンドブック』(全国精神障害者家族連合会)169—173ページ
61「日本精神医学ソーシャル・ワーク協会（PSW協会）35年歩み：歩みに加わった一員の目をとおして」『社会事業史研究』17号(社会事業史研究会)49—64ページ
62「条件その後：記録にしてみられる自分の関心をふり返って」『実践記録：ふたたび実践記録とは：条件をふまえて』19巻120—127ページ
(月昭和天皇権、『平成』に改元)
(3月福祉関係3審議会合同企画分科会、厚生省に「今後の社会福祉のあり方について」意見示す)
(3月国連の「子供の権利に関する条約」採択)
(12月「高齢者保健法」10年改訂案（ゴールドプラン））策定) |
| 1990 | H. 2 | 66 | 63「条件、その順序の検討：問題と課題」『実践記録：実践の波瀾』20巻112—115ページ
(6月「老人福祉法等の一部を改正する法律」(福祉関係8法の改正)）
<table>
<thead>
<tr>
<th>年代</th>
<th>略歴</th>
<th>年齢</th>
<th>坪井宏治年譜及び著作目録</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1991</td>
<td>H.3</td>
<td>67</td>
<td>「研究会の存在意義：用語の問題に関連して」『実践研究：方法への関心』21集117-122ページ</td>
</tr>
<tr>
<td>1992</td>
<td>H.4</td>
<td>68</td>
<td>10月30日虚血性発作に襲われる。肺炎罹患。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>論文</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>65「21集にキーワードを尋ねて：生活援助への敬意」『実践研究：実践の足跡』22集112-117ページ</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>66「受診・受療援助」事例検討にあたっての3段階：作業を進めるための1方法として」</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>『精神医学ソーシャル・ワーク』29号（日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会）5-12ページ</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>67「ＰＳＷの歴史と現状：その倫理的側面から」前掲『精神医学ソーシャル・ワーク』75-91ページ</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（表4）

<table>
<thead>
<tr>
<th>年代</th>
<th>略歴</th>
<th>年齢</th>
<th>坪井宏治年譜及び著作目録</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1993</td>
<td>H.5</td>
<td>69</td>
<td>「病の経験：低肺機能者との立場から」『実践研究：実践者さまざま』23集77-83ページ</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>日本福祉大学における社会福祉方法論教育：担当者の私見として』『社会福祉方法論の課題：課題研「社会福祉方法論研究会」報告書』（日本福祉大学「社会福祉方法論研究会」）3-10ページ</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>「精神保健法」改正。地域生活援助事業（グループホーム）の法制化。精神障害者の定義</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>（12月障害者基本法）成立。精神障害者を障害者として明確に位置付ける。</td>
</tr>
<tr>
<td>1994</td>
<td>H.6</td>
<td>70</td>
<td>日本社会福祉実践理論学会監修『教材社会福祉実践事例集2』医療におけるソーシャルワークの実践事例』（川島書店）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>論文</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>71「関接的通遇法再考：神田橋千佐氏の『抱える環境』に接して」『実践研究：組織への関心』24集94-100ページ</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>72「いま考えるニーズのこと：精神科ソーシャルワーカー国家資格化の問題に関連して」『精神医学ソーシャル・ワーク』32号（日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会）31-41ページ</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>7月増生者・高齢者社会福祉ビジョン懇談会「21世紀福祉ビジョン」発表</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>（12月新ゴールドプラン）策定。今後の子育て支援のための施策の基本的方向について</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>（エンゼルプラン）策定</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>（12月高齢者・自立支援システム研究会「新たな高齢者介護システムを目指して報告」）</td>
</tr>
</tbody>
</table>
| 1995 | H.7  | 71   | 3月日本福祉大学退任。
|      |      |      | 4月「やどかりの里」研究所長に就任する。 |
|      |      |      | （編著） |
|      |      |      | 73谷中雄雄共編『あたりまえの生活ＰＳＷの哲学的基礎 早川 進の世界』（やどかり出版） |
|      |      |      | （対談記録） |
|      |      |      | 74「対談：早川先生からPSWへのメッセージ」（谷中雄雄との対談）前掲『あたりまえの生活PSWの哲学的基礎 早川 進の世界』123-138ページ |
|      |      |      | （編著） |
|      |      |      | 75「あたりまえの生活について」同上87-120ページ |
|      |      |      | 76「組織に関する幻想的観点：記録の8条件再考の手掛かりとして」『実践研究：25年の歩みの現在』25集81-84ページ |
|      |      |      | （7月社会福祉制度審議会報告「社会福祉制度の再構築について」報告） |
|      |      |      | （5月精神保健法改正。精神保健及び精神障害者に関する法律） |
|      |      |      | （12月障害者プラン：ノーマライゼーション7年戦略）策定。社会復帰支援等の設置目標を明確化） |
| 1996 | H.8  | 72   | 「援助関係論の歩み：33年の足跡を振り返る」川田書店 大野博夫ほか編『社会福祉方法論の視点』（みらい）10-21ページ |
|      |      |      | （講演記録） |
|      |      |      | 79「研究会を始めるにあたって：第3回地域精神保健・福祉研究会」『響き合う街で』1号通巻38号（やどかり出版）2-4ページ |
| 1997 | H.9  | 73   | 3月習熟療の手術のため入院。
<p>|      |      |      | （講演記録） |
|      |      |      | 80「第4回地域精神保健・福祉研究会を迎えるに当たって」『響き合う街で』4号通巻41号 |
|      |      |      | （やどかり出版）4-6ページ |
|      |      |      | 81「講演：生活をささえるとは前掲『響き合う街で』85-93ページ |
|      |      |      | （6月「児童福祉法」改正） |
|      |      |      | （12月「介護保険法」成立。2000年4月より実施が決定） |
|      |      |      | （12月「精神保健福祉基本法」成立） |</p>
<table>
<thead>
<tr>
<th>西暦</th>
<th>経歴</th>
<th>年齢</th>
<th>畑上宏昭年譜及著作目録</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1998</td>
<td>H.10</td>
<td>74</td>
<td>5月肺炎のため入院。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>(編著)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>82谷中輝雄・大野和男共編著「援助関係論を目指して：畑上宏の世界」（やどかり出版）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>(論文)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>83「病の経験（その2）：腎機能不全患者の場合」『実践記録：はざまから』28集59－60ページ</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>(八月中央社会福祉審議会社会福祉構造改革分科会「社会福祉基礎構造改革について（中間まとめ）」発表)</td>
</tr>
<tr>
<td>1999</td>
<td>H.11</td>
<td>75</td>
<td>(論文)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>84「病床日記」『実践記録』29集72－74ページ</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>(二月障害者関係三審議会「今後の障害者保健福祉施策のあり方について」発表)</td>
</tr>
<tr>
<td>2000</td>
<td>H.12</td>
<td>76</td>
<td>12月19日、死去。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>(5月「社会福祉の進展のための社会福祉事業等の一部を改正する等の法律（「社会福祉法」）等関連8法改正。6月施行)</td>
</tr>
</tbody>
</table>